

否定文の言語的意味と発話における制約

片岡 喜代子

(神奈川大学外国語学部)

kykk925@yahoo.co.jp

キーワード：否定文、否定呼応表現、随伴命題、随伴想定

1. 導入

否定文は肯定文とともに、文の基本形とも見なされる。例えば日本語の肯定文(1)に対応する否定文とされるのが(2)である。

- (1) 鳥が飛んでいる。
- (2) 鳥が飛んでいない。

(1)の肯定文の論理的・真理条件的意味は、簡略化してはいるが、(3)のように表すことができる。

- (3) $\exists x(x=\text{鳥})(x \text{ が飛ぶ})$

つまり「鳥であり且つ飛ぶものが存在」すれば(3)が成り立つのである。

(1)の肯定文が発話可能な状況は三つ考えられる。言い換えれば可能な用法が三つあると言える。一つは、この文の文字通りの意味が表す「鳥が飛ぶ」という事態を伝える役割をする文と言える。前もって何の状況がなくても「鳥が飛ぶ」事態を認識した時に発話され、談話の初めでも、談話の途中でも発話されることが可能である。つまり、認識可能な事態さえ目前にあれば、言語による文脈がなくても、前もって何らかの想定がなされていなくても、どんな状況でも適切な発話として成立する。

もう一つは、「鳥が飛ぶ」事態が目前に認識されるのに加えて、「飛んでいるもの」或は「鳥」の存在が何らかの形で想定される場合に成立可能な解釈を与える用法である。前者は、例えば「飛行機が飛ぶと思っていたのに、（飛行機ではなくて）鳥が飛んでいる」という状況を表現

する解釈、後者は、例えば「鳥が、木にとまっていると思っていたのに、飛んでいる」という状況で使用される発話の解釈である。言い換えれば、前者は、(3)の式の $\exists x(x \text{ が飛ぶ})$ が想定されており、後者は(3)の式の $\exists x(x = \text{鳥})$ が想定され、それについて新たな情報を加えているとも言える。文脈によってそれらの想定が成立して談話の途中で発話されると、その想定に依っていずれかの解釈が成立する。しかし談話の初めに発話されるためには、認識される事態に加えて、適切な想定が前もってなされている必要がある。

さて、「鳥が飛ぶ」という命題の否定を表す否定文の(2)は、論理的・真理条件的意味としては(4a)もしくは(4b)のように表される。両者は論理的には等価である。

- (4) a. $\neg \exists x(x = \text{鳥})(x \text{ が飛ぶ})$
b. $\forall x(x = \text{鳥}) \neg (x \text{ が飛ぶ})$

これらは「鳥であり且つ飛ぶものが存在しない」事態を表す。この否定命題が表す事態は、「全てのものが飛んでいない」事態を包含する。否定命題では下方含意(downward entailment)が成り立つので(詳細はLadusaw (1979))、「すべてのものが飛んでいない」ということは(4)の「鳥が飛んでいない」を含意する。従って「すべてのものが飛んでいない」事態を前にして、「何も飛んでいない」と言うかわりに「鳥が飛んでいない」と発話しても、なんら論理矛盾が生じるものではなく、発話可能であってもいいはずである。しかしながら、「飛んでいる鳥を含む全ての物が飛んでいない」事態を目前に認識したとしても、適切な想定がなければその認識だけでは、談話の初めの発話としては奇妙に聞こえるはずである。唐突に、(2)の発話が発せられたら、以下のいずれかのように問いただきたくなるものであろう。

- (5) a. 鳥が飛んでいると思っていたの？
b. 何か飛んでいると思っていたの？
c. 鳥が何かしていると思っていたの？

「鳥が飛ぶ」事態を表す単純な肯定命題文は、前もって何の想定もなくても発話可能であるのに対し、対応する単純な命題否定文は、何らかの想定がなければ発話できない。否定文の発話におけるこの制約は、何に

依るものであろうか。

ある文の発話に伴って成立していると想定される事態は「前提 (presuppositions)」という名の下で盛んに議論がなされている。その定義については様々であるが、一般には以下のように捉えられている。

- (6) Presuppositions of S (a sentence) must be satisfied by a context *c* in order for S to be *assertible*, for an utterance of S to be *felicitous*.

(Chierchia and McConnell-Ginet 1990: Chapter 6, 3. p. 280)

つまり、ある文が断言可能であるために、あるいは、その文の発話が適格となるように、その文が発話される文脈で満たされるべき命題というのが一般的な捉え方である。従って、断言(assertion)との対比で論じられたり(Kato 1985)、shadow sentence (Kuroda 1965), implication, entailment (ともに含意)、conversational implicature (会話の含意)等としての議論もなされているが、ここではそれら全般を含めて、少し緩やかな意味で前提と呼ぶことにする。ただ一点だけ明確にしておきたいのは、その前提とされる命題には後続の発話によって取り消し可能なものと取り消し不可能なものがあることが認められていて(Soams 1979, 1982, Heim 1983 他)、その区別がここでの議論に重要な鍵となることである。

片岡(2008)では、否定関連表現を含む文の発話に伴って、文脈に拘らず必ず成立していないといけない命題の存在を指摘し、その命題がその否定関連表現の意味記述に含まれるべき意味内容の一部であると主張した。ある表現に伴って常に成立していなければならない命題を同定し、統語構造の反映である意味に含まれ、文脈に拘らず導かれる意味として位置づけたのである(以下、その命題を「随伴命題」と呼ぶ)。従って、その文の発話が適切であるためには、いかなる場合も、その随伴命題が真となる状況が成立していることが要求される。文脈によって成立可能あるいは共存可能と見なされる前提命題と随伴命題を識別し、否定関連表現の意味記述に必要な随伴命題を同定することを試みたのである。

本研究では、否定そのものの持つ前提に関わる特質について、それが何に依るものであるか、否定文の統語構造が反映されるべき意味の一部としての随伴命題であるか否かという問題を探る。その上で否定文そのものの意味としての随伴命題と、その否定文の発話における制約としての語用論的前提を識別し、否定関連表現を含む文に伴う随伴命題との共通点・相違点などを明らかにする。文そのものの統語的条件とそれに基づ

づく論理的意味、言語的意味としての随伴命題が、語用論的前提とどのように相関し合っ、その文脈での解釈に反映されて行くかを明らかにすることを目的とする。

次節ではまず、従来前提という名の下で議論されてきた事象との関連から、ここで問題にしている事象を位置づける。その上で第3節では、それが統語構造を反映する論理的意味及び言語的意味に含まれる随伴命題とどう関わるかを論じ、片岡(2008)で論じた否定呼応表現との相関で、その発話上の要件がどのように導かれるかを解明していくことを目指す。

2. 否定文の発話における制約

1 で見たように、否定文はなんらかの文脈がなければ発話として適格になされないものである。別の言い方をすれば、先行文脈がなければ談話や発話を否定文から始めることはそもそもないと考えられる。その点に関して、状況との対応をより詳細に示しておく。

以下の例を見られたい。

- (7) a. 雨が降っている。
- b. 雨が降っていない。

肯定文は、前もって天気に関するなんの情報も得ていなくても、あるいは「(雪ではなくて)雨がふる」と天気予報で聞いていても、「雨が降る」事態を認識しさえすれば、適切な発話として成立し、談話の初めでも発話可能である。

- (8) a. (あ、) 雨がふっている。
- b. (天気予報で言ってたように) 雨がふっている。

一方、否定文の方は、使用される状況が限られる。例えば以下のような状況であれば可能である。

- (9) 状況1: 前日天気予報で「明日は雨が降る」という予報を聞いて、翌朝起きて窓の外を見ると雨が降っていなかった。
(天気予報で雨が降ると言っていたが) 雨が降っていない。
- (10) 状況2: 雪が降り続いた後、天気予報で「気温が上がって久しぶ

りに明日は雨が降る」という予報を聞いて、翌朝起きて窓の外を見るとまた雪が降っていて、雨が降っていなかった。

(天気予報で雨が降ると言っていたが) 雨が降っていない。また雪だ。

- (11) 状況3: 空を見上げたら黒い雲が沸いてきて、雨になりそうな空を見て、そのしばらく後で、まだ雨が降っていないのを見て、雨が降っていない。雨が降りそうな空だったのに。

このように言語的であれ非言語的であれ、対応する肯定命題の「雨が降る」という事態を想定させる状況が認識される必要がある。或は、その想定の下に、話者がこの文を発話したと、聞き手に解釈させる文である。その上で、その想定と認識した事態が矛盾していることを伝えている。

論理的には「雨が降っていない」場合には、可能性として「雨が降る」という事態が成立しない、つまり「何も降っておらず空が晴れているか曇っている」という状況や、また「雨ではなくて雪が降っている」事態が成立することが可能である。従って、いずれの状況でも、「雨が降っていない」という発話は真理条件的意味としては矛盾がなく共存可能で、文法的にも適格である。それにも拘らず、単にその状況だけの認識ではなく、対応する肯定命題「雨が降る」の事態に導くような想定が発話者に前もってなければ、この否定文は奇妙に聞こえる。全く何の状況もなくこの否定文の発話だけを発した場合、聞き手は「雨がふると思っていたの？」と聞き返したくなるであろう。つまり、この否定文の発話には、発話者が前もって想定をしていることが付随していると考えられる。

以上のような観察から、否定文の発話の成立には、発話される場面の事態の認識に加えて、言語的であれ非言語的であれ、何らかの文脈を必要とすると言える。否定文の発話が適切に容認されるために、その文脈によって、対応する肯定命題を導出する想定が発話者の側に成されることが必要条件である。その想定を可能にする文脈は、必ずしも単一の命題で表される必要はなく、何らかの存在などを含む非言語的文脈でもあり得る。以下それを「随伴想定」と呼び、言語的意味としての随伴命題と区別する。

以上のように否定文は、文そのものが文法的に適格であっても、その発話には何らかの随伴想定が必要である。それは統語的・意味的に反映されるものではなく、文そのものの文法性にかかわるものではない。

では、その否定文の発話が要求する随伴想定は、随伴命題とどのよう

に関わるのであろうか。次節では、否定呼応表現の各項目が持つ言語的・語彙的意味から来る随伴命題を用いて、それが随伴想定とどのように関わり、発話の中で解釈されていくかを論じていく。そして何らかの随伴想定があることが否定文発話の必要条件であり、その随伴想定の内容を個別具体的に示すのが、個々の否定呼応表現の持つ随伴命題であるとして、解釈に反映される過程を見る。

3. 否定呼応表現における随伴命題

3.1. 取り消し可能性による識別方法

戸次(2008)や片岡(2008)で論じたように、統語構造に反映されるべき意味論的前提と文脈から導出可能な前提とを識別する判断基準の一つとして従来よく用いられてきたものに取り消し可能性がある(Heim 1983)。ある発話 A に引き続き、発話 B が発せられた場合、A の発話に付随していると思われる事態 α を取り消すような内容を B の発話に組み込めるか否かということである。A に続いて B を発すると矛盾を感じ、発話 B が不適切と判断される場合、その事態 α は意味論的前提であると見なされる。

ここで問題にする、どのような状況でも取り消すことが出来ない随伴命題は、言い換えればどのような状況でも成り立つ意味として、統語構造が反映される意味記述に含まれているか、もしくは統語構造から導出される意味と考えるべきである。その判断基準を用いて、片岡(2008)では、否定呼応表現を含む文を調べ、以下のように否定呼応表現の意味記述に含まれるべき意味論的前提としての随伴命題を同定することを試みた。

まずロクナ N の例から示す。(12a)の文の解釈は(12b)のように示され、真理条件的意味としては(12c)のように表すことができる。

- (12) a. 桃太郎はろくなものを食べなかった。
- b. 桃太郎は、何か食べたけれど、ろくでもないものであった。
- c. There is x , such that Momotaro ate x , and that x is not good.

以下のように、この「何か食べた」の部分を取り消す発話を後続させると奇異に感じられる。

- (13) 桃太郎はろくなものを食べなかった。#なにも食べなかった。

「食べたものがある」という一種の存在前提 (existential presupposition (Horn 1996))が、この文の発話には常に随伴して成り立つことが要求されている。つまり「食べたものが何かある」がこの文の随伴命題で、この文の発話が適格であるためには、発話される文脈でこの随伴命題が成立していなければならないのである。勿論、(14)のように前提を取り消すと言われているメタ否定文によって、談話の流れを修正して行くことは可能であるが、(13)が奇異に感じるのは事実である。

(14) 桃太郎はろくなものを食べなかった。実はなにも食べなかったんだけど。

この取り消し可能性という判断基準によって、片岡(2008)では他にも次の項目の随伴命題が識別された。ロクナ N と同様に、ある種の存在前提が随伴命題になるのがアマリである。(15a)は(15b)のように解釈される。

- (15) a. 桃太郎はきび団子をあまり食べなかった。
b. 桃太郎はきび団子を食べたけれど、たくさんではなかった。
- (16) 桃太郎はきび団子をあまり食べなかった。#きび団子は大嫌いで全く食べなかった。

(16)の後半部分のように、食べたきび団子の存在を否定する発話は奇異に感じられる。

次のシカ句の文では、(18i)の肯定命題が随伴命題となる。

- (17) 桃太郎はきび団子しか食べなかった。
- (18) (i) 桃太郎がきび団子を食べた。
(ii) 桃太郎が、きび団子を除いた他のものすべてに関して、それを食べなかった。
- (19) 桃太郎はきび団子しか食べなかった。#お腹が痛かったので、実はきび団子も食べなかったんだけど。
- (Cf.) 桃太郎はきび団子以外食べなかった。お腹が痛かったので、実はきび団子も食べなかったんだけど。

3.2. 否定文の発話が要求する随伴想定との関わり

前下位節で、否定呼応表現そのものが持つ言語的意味としての随伴命題の存在を見た。これらの命題は、否定文の発話そのものが要求する随伴想定について、それが発話される個別の文脈における個々の具体的内容を指定すると捉えることができる。

(20) ロクナ N を含む文

- a. 発話文：桃太郎がろくなものを食べなかった。
- b. 随伴命題：桃太郎が食べたものが何かある。
- c. 随伴想定：命題 x が導出されていて、 x は「桃太郎が食べたものが何かある」である。

(21) シカ句を含む文

- a. 発話文：桃太郎がきび団子しか食べなかった。
- b. 随伴命題：桃太郎がきび団子を食べた。
- c. 随伴想定：命題 x が導出されていて、 x は「桃太郎がきび団子を食べた」である。

(20)のロクナ N 文の発話を聞けば、聞き手は「桃太郎が食べたものが何かある」ことを発話者が想定していると理解するであろうし、(21)のシカ句文の発話に対しては、聞き手は「桃太郎がきび団子を食べた」ことを発話者が想定していると理解するであろう。つまりそれぞれの c の命題の部分が、発話者が前もって想定しているものであり、その文が発話された文脈で満たされていることが確認できれば、その文は適格と判断されると考えられる。

3.3. 構造条件との対応

片岡(2006, 2010)では、これら否定呼応表現の否定辞との構造関係を論じ、それぞれの構造関係が反映された形で、意味が導出されることを見た。しかしながら、その構造関係に基づく論理的意思だけでは、ここで見てきた随伴命題及びそれに基づく随伴想定は導くことができない。随伴命題が統語構造からどのように導かれるかは本稿では議論できず今後の課題とせざるをえないが、ロクナ N とシカ句の例で、それぞれの構造条件と構造に基づく論理的意思から導出される意味、そしてそれと随伴命題及び随伴想定とがどう関わるかを見ておきたい。否定呼応表現と否定要素との構造条件、及びそれに基づく意味の詳細については片岡

(2006, 2010)を参照してほしい。

- (22) ロクナ N の構造条件
ロクナ N は LF において否定要素 (ナイ) に c-統御されていなければならない。
- (23) 発話文：桃太郎がろくなものを食べなかった。
- LF : [[vp ... ろくなもの ...]-ナイ]
 - LF に基づく意味：桃太郎が食べたものはろくなものでなかった。
(ナイに c-統御されることで、否定の焦点として解釈される。)
 - 随伴命題：桃太郎が食べたものが何かある。
 - 随伴想定：命題 x が導出されていて、x は「桃太郎が食べたものが何かある」である。
- (24) シカ句の構造条件
シカ句は LF において否定述部(ナイが付加された VP)と姉妹関係にななければならない。
- (25) 発話文：桃太郎がきび団子しか食べなかった。
- LF : [きび団子シカ[[vp ...]-ナイ]]
 - LF に基づく意味：桃太郎が、きび団子を除いた他ものすべてに関して、それを食べなかった。
(シカ句は否定述部と姉妹関係になることで、主部(Subject)として叙述(Predication)をなす。)
 - 随伴命題：桃太郎がきび団子を食べた。
 - 随伴想定：命題 x が導出されていて、x は「桃太郎がきび団子を食べた」である。

このように、否定呼応表現を含む文は解釈されると捉えることができる。これらの否定文の発話に必要な随伴想定が成り立つために、その文脈において随伴命題が成立していることが要求され、それによってこれらの発話が適格と判断されるのである。

4. スケール解釈と随伴命題の相関

4.1. 否定呼応表現とスケール解釈

否定と共起する表現には数詞の「1+類別詞(classifier)」を含む名詞句も

ある。それらを随伴命題及び随伴想定という観点から考えてみよう。

(26) 桃太郎は、きび団子一つ食べられなかった。

(27) 桃太郎は、きび団子を一つも食べられなかった。

前者は名詞と数詞の組み合わせ（以下 N-one-cl）、後者は格助詞とモが加わった形（以下 N-cm-one-cl-mo）である。形式上はわずかな違いであるが、与える意味解釈は大きく異なる。まず N-one-cl 文には幾通りかの可能な解釈がある。

(28) N-one-cl 文の解釈：

桃太郎は、きび団子一つ食べられなかった。

- (i) (桃太郎は大好きなきび団子なら食べると思ったけれど、それさえ食べられず) 食べるものすべてについて何も食べることはできなかった。
- (ii) きび団子を食べることはおろか、他のものを食べたり飲んだり、何も口にすることができなかった。
- (iii) きび団子一つ食べることはおろか、風呂に入ることも何もできなかった。

いずれも「きび団子一つ食べる」を最低ライン（極点）として、食べ物スケール、飲み物も含めた口に入れるものスケール、動作スケールのいずれかが設定されて、そのスケール上の全ての選択肢を否定することで、全称否定解釈を導いている。そのスケールは文脈によって決まる語用論上のスケールである(Fauconnier 1975)。

一方、N-cm-one-cl-mo 文の解釈は以下である。

(29) N-cm-one-cl-mo 文の解釈：

桃太郎は、きび団子を一つも食べられなかった。

- (i) きび団子である x、そのすべての x について、桃太郎が x を食べることはできなかった。

この場合も最低ラインを導入して、それが導入するスケールの全ての点を否定するという意味ではスケールが関わる解釈ではある。しかしながら、ここで導入可能なスケールは 1 を最低ラインとする「きび団子の数」

スケールのみである。「きび団子五つ、三つどころか、最低の一つでさえ食べることができなかった」として、きび団子についての全称否定解釈を与えるだけであり、言語表現の意味からくるスケールと言える。

この違いは以下のように後続する文の適格性で確認することができる。

- (30) 桃太郎は、きび団子一つ食べられなかった。#ぼたもちを食べたけれど。
- (31) 桃太郎は、きび団子を一つも食べられなかった。ぼたもちを食べたけれど。

(30)は、すべての可能性を否定するはずが、「ぼたもちを食べる」という肯定命題を言うことで矛盾が生じる。一方、(31)は「きび団子」についてのみの言明であり、「ぼたもちを食べた」という事態とは矛盾せず、従って適格に判断され得るのである。

4.2. スケール解釈と随伴命題と随伴想定

以上のように N-one-cl と N-cm-one-cl-mo はともにスケール解釈を導くが、導入されるスケールは大きく異なる。N-cm-one-cl-mo は N つまり「きび団子」だけの数を問題にする。一方 N-one-cl は数詞を含んではいるが「食べたきび団子の数」を問題にしている文ではない。「きび団子一つを食べる」を極点とするが、その文脈で設定可能なスケール上の「あらゆる要素についての叙述 *P*」の成立可能性の存在が想定され、その想定されるスケールは文脈により何種類か存在する。つまり数詞の「1+類別詞(classifier)」を伴う表現が極点を示すということは文脈に関わらず成り立つことであり、従って、何らかの方法で語彙的意味の記述に加えられなければならない意味の部分であるが、どのスケールが選ばれるかは文脈によって決まる。

では、この二つの表現はそれぞれ、発話の中でどのように解釈されるであろうか。構造条件については、片岡(2009, 2010)を参照されたい。

まず N の数だけを問題にする N-cm-one-cl-mo から考えてみよう。

- (32) N-cm-one-cl-mo の構造条件：
N-cm-one-cl-mo は LF において否定要素の c-統御領域外になければならない。
- (33) 発話文：桃太郎は、きび団子を一つも食べられなかった。

- a. LF: [きび団子を一つも[[vp]-ナイ]]
- b. LFに基づく意味: きび団子である x 、その x の個数 $1, 2, 3, \dots, n$ すべてについて、桃太郎が x を n 個食べるができなかった。
- c. 随伴命題: なし
- d. 随伴想定: 命題 x が導出されていて、 x は「桃太郎がきび団子を食べる」である。

N-cm-one-cl-mo についてはこのように捉えることが可能である。一方 N-one-cl は少し複雑である。仮に以下のように表してみよう。

(34) N-one-cl の構造条件

N-one-cl は LF で否定要素の c-統御領域内になければならない。

(35) 発話文: 桃太郎は、きび団子一つ食べられなかった。

- a. LF: [[vp ... きび団子一つ ...]-ナイ]
- b. LFに基づく意味: きび団子である x が存在し、その x について、桃太郎が x を食べるができなかった。
- c. 随伴命題: なし
- d. 随伴想定: 命題 x が、如何なる状況でも最も成立可能であり且つ成立可能な事態の最低ラインであると導出されていて、 x は「桃太郎がきび団子一つ食べる」である。
- e. 文脈によるスケールの設定: 命題「桃太郎がきび団子一つ食べる」は、どのスケールにおいてもその最低点(極点)になる。その上で、文脈から成立可能な命題 P が順次想定される。

以上のように考えるが、いずれにしてもそれぞれの d, e の過程は、発話される文脈が決めるものであり、語用論的前提と言うべきである。それらに必要な文脈がなければ発話は適切に解釈されない。

5. 今後へ向けて

本稿では、否定文の発話における制約という観点から、幾つかの否定関連表現を含む否定文を見て、言語表現の意味的前提(随伴命題)と、発話において要求される想定(随伴想定)との識別を試みた。否定文の発話の成立には、発話される場面の事態の認識に加えて、随伴想定が発話者の側に成されることが必要条件であり、その否定文の文法性とは独

立のものである。言語的意味としての随伴命題と発話者の語用論的要件である随伴想定との発話における関わりを記述し、随伴想定の内容を個別具体的に示す役割をするのが、個々の否定呼応表現の持つ随伴命題であるとした。しかしながら、議論を尽くしたとは言えず、ここでの提案は一つの試案であり、またその解釈過程が形式化されたものでもない。今後更に議論をすべき問題点が多いが、ここで提示したものは否定文の発話における役割を全うするための制約と捉えることができよう。

また発話における事態の認識の役割についても言及したが、判断（認識）の違いと文タイプの関係については、Kuroda (1972)が論じている。Kuroda は、日本語の N ガ文と N ハ文について、その文の発話場面における事態に対する話者の認識の違いに基づき、*thetic / categorical judgment* という判断の違いの現れとして、両者の用法の違いを記述し論じている。本稿では、認識と否定文の文タイプとの関係にまで踏み込むのは到底力の及ぶ所ではなく論じることができなかつた。その点については単に、「何らかの想定の上に、事態を認識し、その想定との矛盾を認識した場合に否定文の発話が成される」とするにとどめた。より深い議論は今後の課題としたいが、現時点で言えることは、認識された事態と比較対照されるために随伴想定で導出されるのは、否定文の発話の場合その対応する肯定命題であるということである。例えば2で指摘したように、「雨が降っていない」という否定文の発話には対応する肯定命題の「雨が降る」という事態を想定させるような状況が認識される必要がある。当たり前のことのようにはあるが、肯定命題がまず想定されて否定文が発話できるのである。肯定文を無標の文形式であるとするのは (Swart 2010) 直感的にも理にかなっていると言える。

個別の例として、今後議論を要するのは、シカ句に関連してダケ句の文である。

(36) 桃太郎はきび団子だけ食べた。

一般にダケは英語の *only* の対応表現とされ、ダケ句文の解釈は通常英語の *only* 文に対して与えられる解釈と同じであるとされる。例えば *only* を含む文(37a)では、(37b)と(37c)が含意(*imply*)されると見なされる。

- (37) a. Only Lucy came to the party.
b. prejacent implication: Lucy came to the party.

- c. exclusive implication: No one other than Lucy came to the party.
(Roberts 2005: (1), (2), (3))

Roberts (2005)は(37b)が意味論的前提であると主張する。つまりここでいう随伴命題であり、文脈に関わらず成り立つ必要がある。以下のように取り消す発話は不自然に感じられる。

- (38) 桃太郎はきび団子だけ食べた。#お腹が痛かったので、実はきび団子も食べなかったんだけど。

(37c)の部分は、言語的意味から導出されるものではない。ここでいう随伴命題か否か、また文脈における語用論的前提とみなすべきか否か等、今後議論すべき問題である。またダケ句の文とシカ句文の違いは、前提を取り消す表現とされる「～わけではない」という表現に埋め込むとより明らかになる（戸次 2008、片岡 2008）。

- (39) 桃太郎はきび団子をサルにしかやらなかったわけではない。#実はサルにもやらなかった。

- (40) 桃太郎はきび団子をサルにだけやったわけではない。実はサルにもやらなかった。

更なる考察が必要ではあるが、従来 *implication* とされている概念の位置づけなどもより明らかになると思われる。今後の課題としたい。

参考文献

- 戸次大介 (2008) 「日本語における前提概念の同定」 日本言語学会第 136 回大会予稿集.
- Chierchia, Gennaro and Sally McConnell-Ginet (1990) *Meaning and grammar: an introduction to semantics*. Cambridge, MA., London, England: The MIT Press.
- Fauconnier, Gilles (1975) Pragmatic Scales and Logical Structure. *Linguistic Inquiry*. 6: 353-375.
- Heim, Irene (1983) On the projection problem for presuppositions. In: M. Balow, D. Flickinger, and M. Wescot (eds.) *Proceedings of WCCFL 2*.,

114-25, Stanford University.

- Horn, Laurence R. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Horn, Laurence R. (1996) Exclusive company: *Only* and the dynamics of vertical inference. *Journal of Semantics* 13.1: 10-40.
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造: かき混ぜ文と否定呼応表現』 東京: くろしお出版
- 片岡喜代子 (2008) 「否定関連表現と前提」 日本言語学会第 136 回大会予稿集 372-377.
- 片岡喜代子 (2009) 「「N一人」と「Nが一人も」」 *KLS 29. Proceedings of the Thirty-third Annual Meeting* (June 7-8, 2008). 12-22. Kansai Linguistic Society.
- 片岡喜代子 (2010) 「否定極性と統語的条件」 『否定と言語理論』 編者: 加藤泰彦, 吉村あき子, 今仁生美 118-140 東京: 開拓社.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative sentences in Japanese*. Sophia Linguistica Monograph 19. Tokyo: Sophia University.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted in 1979 in series of *Outstanding dissertations in linguistics*. New York: Garland.
- Kuroda, S.-Y. (1972) The Categorical and the thetic judgment. *Foundations of Language* 9: 153-185.
- Ladusaw, William A. (1979) *Polarity sensitivity as inherent scope relations*. New York and London: Garland Publishing, Inc.
- Roberts, Craige (2005) *Only and conventional presupposition*. ms. The Ohio State University.
- Soams, Scott (1979) A projection problem for speaker presuppositions. *Linguistic Inquiry* 10: 623-666.
- Soams, Scott (1982) How presuppositions are inherited: a solution to the projection problem. *Linguistic Inquiry* 13: 482-545.
- Swart, Henriëtte de (2010) *Expression and interpretation of negation: an OT typology*. *Studies in Natural Language and Linguistic Theory* 77. Dordrecht, Heidelberg, London, New York: Springer.

The linguistic meaning of negative sentences and restrictions on their utterance

Kiyoko Kataoka

(Faculty of Foreign Languages, Kanagawa University)

As is generally agreed, the linguistic meaning of a sentence consists of its logical meaning, which reflects the syntactic relations of its constituents, and presupposed propositions, if any, which are required to be true although they may not be derived from the logical representations (i.e., ‘zuihan-meidai’ or *required propositions*). We observe that, for an utterance of a negative sentence to be felicitous, the speaker must make beforehand a relevant presumption (i.e., ‘zuihan sootee’ or *required presumption*), which is not reflected syntactically or semantically, but is a pragmatic requirement; without the required presumption, the utterance could not be appropriate even though the sentence itself is grammatical. The utterance of a negative sentence, therefore, involves its logical meaning, the *required propositions* as semantic meaning, and the *required presumption* as a pragmatic restriction. This paper examines negative sentences which contain negation-sensitive elements to explore how a *required proposition* and a *required presumption* for a negative sentence interact to give rise to a relevant interpretation in the discourse where it is uttered.